

## 5. 鹿島労災病院におけるクラミジア尿道炎の臨床的検討

秋元 晋 (千大)

角谷秀典, (鹿島労災)

1984年11月から1985年5月までの男子尿道炎患者21名を対象として、クラミジア トラコマーチス (以下 CT) の感染状況を調べた。CT 感染は、淋菌性尿道炎9名中1名11.1%、非淋菌性尿道炎では12名中5名41.6%にみられた。湿固定、パパニコロー染色における封入体は、CT 特異抗体と結合しなかった。細胞診標本を用いた PAP 法は、直接塗抹 FITC 法と不一致が多かった。

## 6. 血精液症と前立腺炎

布施秀樹 (千大)

1981年1月より1985年4月までに千葉大学医学部泌尿器科で経験した血精液を主訴とした患者76人を対象とした。初診時年齢は30歳台および40歳台で過半数を占めた。前立腺炎を認めたものが過半数を占めた。治療は、炎症性所見をみるものは抗生剤を中心とし、非炎症性病性のものには主として止血剤を投与した。前者は、半数に有効であった。後者は、73%と最も有効なものが多かった。

## 7. 尿道炎の地域差について

村上信乃 (旭中央)

石川堯夫 (国立千葉)

北村 温 (国立国府台)

片海七郎 (君津中央)

秋元 晋 (千大)

千葉県を3つの地域に分割して、各地域での尿道炎の実態を調べた。京葉地区 (千葉大, 国立千葉, 国立国府台) に昭和60年2月1日より4月30日迄の3か月間に上記の病院を受付した尿道炎患者は18名で、内6名は淋菌性尿道炎であった。南総地区 (君津中央) は47名の尿道炎を中14名が淋菌性であり、北総地区 (旭中央) では44名中19名と、いずれの地区でも淋菌性尿道炎の割合が少なかった。

## 8. 厚生中央病院における尿道炎10年間の推移

瀬川 襄, (厚生中央)

昭和50年1月より、59年12月までの10年間、当院にて取り扱った症状を伴った尿道炎について観察した。

尿道炎の数は毎年着実に増加しており、10年間で3倍強となっている。淋菌性尿道炎についてみると、その増加率は更に高く、約10倍になっている。

年齢分布をみると年齢とも非淋菌性尿道炎に比して、淋菌性尿道炎はやや、若年層に多い傾向があった。

更に男子淋菌性尿道炎の診断法として、単染色塗抹標本は完全とは云えるいまでも日々の臨床の場では充分有用であること、併せて、初期尿沈渣による淋菌培養の有用性にも言及した。

厚生中央病院と同じ診療圏で開業している当院の最近5年間の尿道炎患者について、その頻度、年齢等についての推移を観察し、患者数の増加、若年令化の傾向が見られた。

## 9. 非淋菌性尿道炎と開業医

藤田秀雄 (藤田クリニック)

非淋菌性尿道炎は最近とみに増加しつつある尿道炎であります。この疾病が何故にかかる増加を見たかは原因は割合単純なものだと思います。若者の都市への集中化、フリーなセックス、又抗生物質の乱用なども上げられましようが何と云ってもピルやリングの普及で所謂商売人が全くノーガードでセックスを行っている事実を上げなければなりません。言い換えれば性病に関する無智識と言わねばなりません。我々性病科医の前に現われるのはそういった病気の商売人達とその被害者達であります。そしてその商売人達を軸として始まった性病が一般人にも波及し一見健康人と見える性病特有の状況、女性は無症状などの条件と相まって今や性病蔓延時代と言っても過言でない様相を呈しています。病気の部位が泌尿生殖器であるということ、年齢層も次第に低くなりつつあることを考える時、その予防と撲滅は急を要する事だと考えます。もとより医師は政治家や警察官ではありませんからそれを規正する何ものも持っておりません。しかし単に尿道炎の治療のみでなく性病知識の普及とその予防治療に専念すべきだと思い演題を提供致しました。